授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2501 号

Prevalence and Factors Associated with Uncorrected Presbyopia in a Rural Population of Japan: The Locomotive Syndrome and Health Outcome in Aizu Cohort Study

未矯正老視の有病割合と関連因子:ロコモティブシンドロームと健康アウトカムとの関連性を分析する会津コホート研究

貞松　良成（さだまつ　よしなり）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
老視は、眼鏡、コンタクトレンズ等により容易に矯正可能だが、未矯正の老視の有病率は、先進国では 50 歳以上の 34%、発展途上国では 50%と高く、国際的にも問題になっている。失明や視覚障害の調査の多くは遠見視力障害に焦点を当てており、近見視力障害に対する検討が大きく不足している中、日本の一般住民における未矯正の老視の有病率は明らかにされていなかった。 本論文は、1,000 名以上の実際の地域住民を対象に視力検査を行い、日本において初めて老視による視覚障害の有病割合とその関連因子を明らかにしている。未矯正の老視の有病率は 26.4%[95%信頼区間（CI）:23.9～29.0%]であり、日本の地域住民の約 4 分の 1 が十分な近見視力を有していないことがわかった。また、多変量解析の結果、未矯正の老視と関連する要因は、高齢（調整オッズ比：1.05［95%CI：1.03～1.08]）、女性（調整オッズ比：1.39［95%CI：1.01～1.92]）、遠見時視力障害(調整オッズ比：2.65［95%CI：1.70～4.14]）であることが示された。 以上から、本論文は、臨床疫学的に非常に意義のある論文といえる。さらには、視覚障害の定義も WHO の最新の定義を用いており、高齢、女性、遠見視力障害が有意な関連因子であることを明らかにした点においても新規性が高い。 人口の高齢化が進む先進国において、近見視力に関する健康リテラシーを高めるような公衆衛生的な介入の必要性が高い集団の属性を明らかにした価値のある論文である。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。